

神奈川県立歴史博物館

北からの開国—海がまもり、海がつないだ日本—

開催期間：2019年 7月13日（土）～2019年 9月 1日（日）



会場全景



展示室入り口



海の日イベント



三浦半島現地見学会

【企画展の内容・目的】

- 平成27年度から29年度に支援を受けた「海の学び調査研究サポート」の成果公表事業として実施しました。
- 「鎖国」から開国への歴史の中で、海の役割が変化したことを、P3の調査で確認した資料をもとに観覧者へ伝えました。
- また、ロシアからの開国通商要求をはじめとする対外的圧力への対応として、幕府は「鎖国」を維持するために海を守る必要が出てきたことを紹介しました。
- 関連事業としては、子ども向け展示を無料ゾーンで展開することで、子どもにも「海」について深く学ぶ機会としました。
- あわせて、子ども向け学習支援用ワークブックを作成配布し、子どもが展示資料に関心を持って観察するようにしました。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：2019年 7月13日（土）～2019年 9月 1日（日）
- 開催場所：神奈川県立歴史博物館 特別展示室
- 入場者数： 7, 079人



I 「北の海へのまなざし」

展示への導入を図るため、この展覧会を象徴する林子平自筆の《海国兵談》を展示することで、ロシアの南下政策に危機感を抱き、日本列島は四方を海に囲まれた「海国」であることから、海国ならではの防衛体制を構築すべきことをはじめて主張したことなどを示すことで、日本の歴史にとって「海」が果たした役割について、観覧者が理解できるように努めました。

そこで、ロシアの南下政策により脚光を浴びることになった蝦夷地ならびにその原住民であるアイヌについても紹介することで、18世紀における日本をとりまく国際環境をについて説示しました。

資料選定にあたっては、P3の調査にもとづき、当時の人々が「海」をどのようなものとして認識していたのかを知る資料を中心に展示するとともに、日本が四方を海に囲まれていることを具体的に示すため、壁面へ大型写真パネルを設置しました。

そのうえで、担当学芸員ならびにボランティアによる解説を定期的に行い、展示だけでは理解しづらい部分を補うことで、「海の学び」への理解が深まるように努めました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



Ⅱ 「海を越えて一ひと・モノ・情報」

桂川甫周《北槎聞略》(国指定重要文化財)、『鷹見泉石関係資料』(国指定重要文化財)、『間宮林蔵関係資料』(国指定重要文化財)などの資料により、大黒屋光太夫などの海外へ渡った人々や、彼らから海外情報を得ようとその周辺に集まった蘭学者などを紹介することで、いわゆる「鎖国」時代において、ひと、モノ、情報がどのように往来していたについて、「海」の役割の変化を念頭に理解してもらえるようにしました。

資料選定にあたっては、P3の調査にもとづいて行いました。展示ケースの関係から一挙に展示できない卷子状の《北槎聞略》については、全画面を複製を大型壁面に掲出することで「海」を渡ってもたらされた品々の全貌を一覧できるようにしました。

そのうえで、担当学芸員ならびにボランティアによる解説を定期的に行い、展示だけでは理解しづらい部分を補うことで、「海の学び」への理解が深まるように努めました。



Ⅲ 「海を巡る」

異国船の来航に備え、海岸防禦(海防)態勢の充実を図るために幕府が行った、海防巡見の様子を記録した《近海見分之図》などの画像資料や、巡見が実施された当時の状況を具体的に伝える『伊豆国韮山代官江川家関係資料』(国指定重要文化財)などを展示することで、海防巡見の実態を理解していただくとともに、当時の海岸風景について知っていただきました。

P3の調査にもとづき、資料選定を行いました。冊子体である《近海見分之図》については、展示とは別に全画像を大型壁面に掲出することで、内容全体を一覧することができるようにしました。そのうえで、担当学芸員ならびにボランティアによる解説を定期的に行い、展示だけでは理解しづらい部分を補うことで、「海の学び」への理解が深まるように努めました。



IV「海を守る」

三浦半島の海防を実際に担当した川越藩や彦根藩や江戸湾防備方針の策定に影響力を持っていた伊豆国韮山代官江川太郎左衛門に焦点を絞り、『前橋藩松平家記録』（群馬県指定文化財）、『彦根藩井伊家文書』（国指定重要文化財）、『伊豆国韮山代官江川家関係資料』（国指定重要文化財）により、当時の状況を具体的に観覧者に理解してもらえるようにしました。

P3の調査にもとづき、資料選定を行いました。そのうえで、担当学芸員ならびにボランティアによる解説を定期的に行い、展示だけでは理解しづらい部分を補うことで、「海の学び」への理解が深まるように努めました。

【来館者の声】

- 展示解説がとてもわかりやすく興味深かった。
- 古代から海は海外との人的、文化的交流の貴重なルートであり、現在においても同様とおもいます。（海を完全に閉ざすことはできません）。
- 世界とつながっている。地球の7割が海だと学んだ。
- 海洋は世界共有のものであるとつくづく思った。平和利用の大切さを認識することができた。

2. 関連事業の内容

■①特別展記念講演会

【開催日時】2019年8月4日（日） 14:00～16:00

【開催場所】神奈川県立歴史博物館 地下講堂

【参加者数】 77人（募集人数：70人 応募者数：195人）

【実施内容・目的】

- 近世後期の対外関係史、特に日露関係史を専門とする東京大学名誉教授・藤田覚氏に、本展の基盤となっている研究成果に触れつつ、展示内容をさらに掘り下げる講話をしていただいた。
- 当日は、「江戸時代後期日露関係の歴史的意義」をテーマとし、「海から見た歴史」を聴衆が実感できる内容のお話しをいただいた。



※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

【来館者の声】

- これまで日露関係について知らなかった歴史について知ることができて良かった。
- 北の海を舞台にした歴史についてよくわかった。
- 専門的な話を聞いて勉強になった。

■②連続講座「近世後期における「海」」

【開催日時】2019年 7月20日（土）、7月27日（土）、8月3日（土）、8月24日（土）、8月31日（土） 14:00~16:00

【開催場所】神奈川県立歴史博物館 地下講堂

【参加者数】のべ308人（募集人数：70人・応募者数：203人）

【実施内容・目的】

- P3の成果の一部を、研究分担者として参加した専門家により、それぞれの専門分野を切り口として、近世後期における「海」をテーマにお話しいただいた。
- 海を常に意識した人々のみならず、海に面していない地域に住む人々や日露関係の歴史的舞台となった蝦夷地の原住民族であるアイヌの人々が、「海」をいかなるものと認識していたのかについても知っていた。



開催場所の全景



連続講座の全体説明



「近世後期における「海」」を共通テーマに、P3の調査研究に参加した5人の研究者によりそれぞれの専門の立場からの講演を行いました。

第1回は、展覧会を企画した嶋村が、特別展の内容を踏まえつつ、それまで異国の接近を容易に許さない自然の要害であった「海」が、日本と異国とを結ぶ路へと変化したことについて、多くの画像資料もちいてわかりやすく説明しました。



海を見て海を学

月13日(土)の
博物館 コレク
473人(ワー

- 本展示とは別に、黒科ブーンの子どものための展示スペースで、展示を行うことで、中学生以下を対象とした子どもたちにも「海」について学ぶ機会としました。
- 子ども向け学習支援ワークブックに書かれた海岸問題を解くために、展示資料をじっくり観察し、そこから独自の意見を導き出す作業を通して、みずから「海」について考えるよう促しました。

津村怜薫氏からは、「近世後期における海防技術の導入と展開」と題して、「海」を守るための海岸防衛問題を解くために、展示資料をじっくり観察し、そこから独自の意見を導き出す作業を通して、みずから「海」について考えるよう促しました。



津村怜薫氏からは、「近世後期の江戸湾防備と忍藩・地域」と題して、領地が海に接していない忍藩藩士が海防担当として海をどのように守っていたのか、海をどのようなものとして認識していたのかという点についてお話しをいただきました。



吉村智博氏からは、「近世後期の日露関係史とアイヌモシリ『蝦夷凶』に見る認識と対抗」と題して、日露関係史の主要な舞台となったアイヌモシリ(蝦夷地)について、海との関係も踏まえて、お話しをいただきました。

【来館者の声】

- 「海の役割の変化」が日本の歴史を変えたことを知って驚いた。
- 「鎖国」をしているからこそ、海を守らなければならなかったことを学べた。
- 海に面していない領地の忍藩の人々が江戸湾を守っていたことをはじめて知った。
- 大黒屋光太夫などの漂流民についてよく知ることができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。



開催場所の全景の様子



ボランティア解説インへの説明



展示資料を注意深く見てもらうことを念頭に自由導線とし、子ども自身が関心を持った資料をじっくり観てもらえるようにしました。その後、子ども向け学習支援用ワークブックの記述に従い、資料を見て考えという作業を中心に観覧してもらうようにしました。



子どもが関心を持てるよう、ロシアが通商を求めるきっかけとなったあざらしの剥製を展示しました。そして、アザラシが生息するオホーツク海の海流は日本へ向けて海流が流れていることを、衛星画像をもとに理解してもらえるようにしました。



海流の画像パネルに加え、帆船の模型を展示し、蒸気船が発明されるまでの船は、風と海流の影響を受けて航行することを理解してもらえるようにしました。あわせて、海上で進む方向を決めるために必要となる、八分儀や天球儀などの航海道具を展示しました。展示解説パネルには、使い方などの詳細な説明を記述せず、子ども自身で何に使ったか考えられるような質問形式にし、詳細説明は別紙で渡すようにしました。また、保護者の方と一緒に考えてもらえるようにしました。

【来館者の声】

- 海が文化を伝えるためにいろいろな場面で使われていることは面白いと思いました。
- 海を通して日本と世界がつながっているのだと思いました。
- 海はきょうつうする場でもあるんだなあと思った。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

■④教員向け講座「教科書だけでは学べない神奈川の歴史」

【開催日時】 2019年 7月30日（火） 10:00～16:00

【開催場所】 神奈川県立歴史博物館 地下講堂

【参加者数】 26人（応募者27人）

【実施内容・目的】

- P3でプロトタイプとして作成した「海の学び」学習支援プログラムを紹介するとともに、実際の授業での活用について検討する機会としました。
- 「海の学び」に関わる展示資料の教材化ならびに、近世後期における対外関係に関する単元において、展示内容をもとにした学習指導案を作成するための指導・助言を行いました。



P3で作成した「海の学び」学習支援プログラムを紹介するとともに、特別展へ出品している資料の中から、授業で活用可能な資料について説明を行いました。また、各資料について授業で利用することで懸案となる事柄等について質疑を行いました。



参加者26人を5グループに分け学習指導案作りを行っていただきました。グループの構成員は、校種や教科に偏りがでないよう事前に割り振っておきました。直接歴史分野に関係ない教員も、同じグループ内の教員と相談しながら、自身が担当する教科目の授業を想定し、学習授業案の作成を行いました。



学習指導案作成後は、各グループ内で意見交換を行ってもらった後、各グループから代表して1つの学習指導案を発表してもらい、全体で討論を行いました。

【来館者の声】

- 近くに海があるので、自然観察だけでなく、「歴史」についても学ばせたいと思った。
- 「海の役割」が変わったということに気づかされた。「鎖国」を教えるときのヒントになった。
- 「海」を共通項に、理科と社会との横断する授業ができるのではないかと。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。

■⑤現地見学会「大人の遠足 三浦半島のお台場をたどる」

【開催日時】2019年5月23日(木) 9:00～12:00、
13:00～16:00

【開催場所】三浦半島

【参加者数】59人

【実施内容・目的】

- 実際に海岸防禦（海防）の現場となった三浦半島の海防施設を専門家の案内で見学することで、歴史を追体験してもらいました。
- 三浦半島の海防に詳しい専門家に講師を依頼し、異国船の航行ルートと台場の位置関係など、当時どのように海を守ろうとしていたのかを理解することができました。



出発地 久里浜公園内に建つ

ペリー上陸記念碑

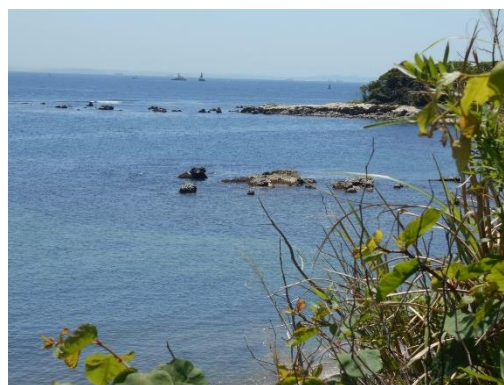


趣旨説明に続き講師紹介



横須賀市教育委員会の協力により

千代ヶ崎砲台跡も見学しました。



幕末に設置された千代ヶ崎台場跡



1853年日本との通商条約締結を目的としてアメリカ合衆国政府によって派遣されたペリーがはじめて上陸した場所である久里浜から当時、浦賀奉行所が置かれていた西浦釜での海防施設を実際に見学することで、異国船の来航に対して当時の人々はどのように海を守っていたのかを再確認しました。



江戸湾の内海を防禦すべく設置された台場の跡をたどることにより、幕府の海防方針について学びました。とくに、観音崎付近からの房総半島側の富津、三浦半島側の猿島、横須賀、金沢などの地点の方向や距離感などを実感してもらいました。あわせて、展示資料の《近海見分之図》の図像と対比することで、当時と現在との比較を行っていただき、当時の状況について深く理解してもらいました。

【来館者の声】

- 江戸時代末期の海防に一端に触れることができました。
- 房総半島と三浦半島の近さを実感できました。日本近海のみならず東アジア全域の海域からの視点が重要であることを認識しました。
- 海防の観点から海を考えることがき、新しい視点、気づきがあった。

■⑥学芸員による展示解説

【開催日時】2019年 7月13日(土)、14日(日)、15日(月・祝)、16日(火)、17日(水)、18日(木)、19日(金)、25日(木)、31日(水)、8月12日(月・振休)、18日(日)、24日(土)、30日(金)

【開催場所】神奈川県立歴史博物館 特別展示室

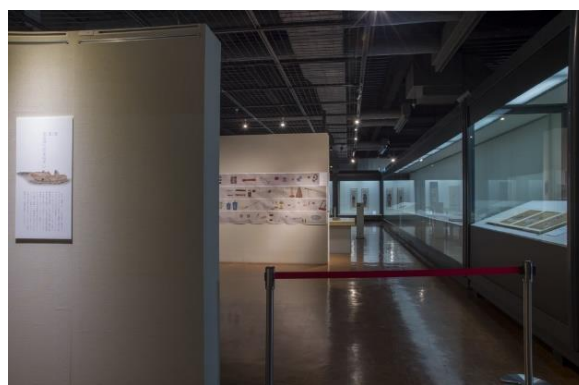
【参加者数】 386人(当日自由参加・中途参加者含まず)

【実施内容・目的】

- P3の調査研究で得た知見も含め、特別展示会場において直接担当学芸員が展示内容の解説を行い、参加者からの質疑への対応も行いました。
- 一方的な解説にならないよう、「海の学び」に関する展示・資料解説を中



解説会場導入部



解説会場入口



解説を行う担当者



担当者の説明を聞く参加者

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



航海技術や造船技術の発達により異国船が日本近海に頻繁に接近するようになると、多くの知識人がそれまで自然の要害として機能していた「海」が、日本と異国との結ぶ実日になったとの認識をもち、「鎖国」を維持するためにも海岸防禦を強化する必要があることを主張しました。このことを、如実に示す資料を展示し、来館者へ語りかけました。



海がひと、モノ、情報をの移動に重要な役割を果たしたこと、日本にとっては平和で安定した社会を維持するために「鎖国」を続けるために、海防の充実をはかる必要があり、そのために江戸湾周辺の海防施設の巡見がたびたび行われたことを資料にもとづき説明しました。また、当館所蔵「近海見分之図」が江戸時代末期の海岸風景を今日に伝える重要な資料であることを紹介しました。

【来館者の声】

- 海が文化を伝えるためにいろいろな場面で使われていることは面白いと思いました。
- 海を通して日本と世界がつながっているのだと思いました。
- 海はきょうつうする場でもあるんだなあと思った。

【事業全体のまとめ】

日本の開国はペリー来航からではなく、ロシアからの通商要求から始まったこと、自然の要害であった「海」が日本と世界とをつなぐ「路」に変貌を遂げた18世紀末からの歴史を通していわゆる「鎖国」下にあった江戸時代の人々が「海」をどのようなモノとして認識していたか、「鎖国」を維持するためにどのように「海」を守ろうとしたのかについて、歴史における「海」の役割についてまったく意識していなかった多くの方々に知っていただく機会となりました。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 横須賀市教育委員会	現地見学会の支援
2.	
3.	
4.	
5.	

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 日本経済新聞	北からの開国展 2019年5月15日
2. 美術の窓	展覧会スケジュール7月号 2019年6月1日
3. 毎日新聞（広告掲載）	北からの開国展 2019年7月6日
4. 神奈川新聞（広告掲載）	北からの開国展 2019年7月4日
5. 東京新聞	北からの開国展 2019年8月27日

以上